

寸劇台本 杜子春

原作・芥川龍之介《あくたがわりゆうのすけ》

キャスト 杜子春《とししゅん》

母親

鉄冠子《てっかんし》

閻魔大王《えんまだいおう》

峨眉山《がびざん》の悪魔二人

唐の都洛陽の西門の下に、ぼんやりと空を見上げる一人の若者がいる。名を杜子春といい、元は大金持ちの息子だったが、今は落ちぶれてその日暮らしに困っている。

(杜子春一人立っている。)

杜子春 「あ一金がほしーい」 (といて、しゃがみ込んでいます。)

鉄冠子 「おまえは何を考えているのだ。」 (鉄冠子現れる)

杜子春 「えっ、突然びっくりしたなー。あなたはどなたですか。」

鉄冠子 「わしは鉄冠子という仙人じゃ。おまえは何を考えている。」

杜子春 「わたしですか。私は今夜寝るところもないので、どうしたものかと考えているのです。」 (といて、顔を伏せてしまう。)

鉄冠子 「そうか、それは可哀そうだな、何が欲しい。」

杜子春 「お金ですよ。お金をください。」

鉄冠子 「ほほーじゃあ わしが好いことを教えてやろう」 (夕日を指さして)

「もうしばらくして沈む夕日を浴びたお前の影が地に映った頭の部分を、今夜ここにきて掘ってみろ、荷車いっぱいの黄金があるはずじゃ」

杜子春 「本当ですか。」驚いて伏せていた顔を挙げたが、仙人の姿は消えていた。

(再び、杜子春西の門の下でしゃがみ込んでいる。)

鉄冠子 「どうした杜子春」

杜子春 「あ、いつかの仙人。できれば、何か食べるものは、ございませんか。」

鉄冠子 「おまえは、大金持ちになったではないか。」

杜子春 「ええ、この三年間にすっかり使ってしまいました。」

鉄冠子 「友だちもいっばいいたではないか。」

杜子春 「いえ、みんな金目当てで。みんな、私を見ていたのではなく、みんな、金を見ていたんです。」

「みんな、私と話していたのではなく、みんな、金と話していたんです。金がなくなったら、誰もいなくなっていたんです。」

鉄冠子 「おまえの望みは何だ。」

杜子春 「何か食べるものと、少しお金を。」

鉄冠子 「まだ金がほしいというのか？」

杜子春 「お願いします。」

(杜子春一人うなだれている。そこに、鉄冠子現れる。)

鉄冠子 「おまえの望みは何だ。」

(杜子春は、首を振るだけ)

鉄冠子 「ほほー じゃあ、また金を授《さず》けよう。この前にいったとおり……。」

杜子春 「もう金なんかありません。もう金なんかありません。それより、あなたの弟子にしてください。あなたは、仙人ですね。私は、あなたのような仙人になりたいです。」

鉄冠子 「ほほー いかにも、私は鉄冠子《てっかんし》という仙人じゃ。仙人になるための修行は、辛いぞ。」

杜子春 「はい。覚悟しています。」

鉄冠子 「仙人になるための修行で、命を落とすかもしれないぞ。」

杜子春 「はい、覚悟しています。」

鉄冠子 「ほーでは行くぞ！」

(仙人が立って、杜子春は座っている。)

鉄冠子 「杜子春、ここが峨眉山じゃ。足を踏み外すと、崖の下に真っ逆さまじゃ。わしは、天上界《てんじょうかい》に行き、西王母《せいおうぼ》にお目にかかってくる。わしが帰ってくるまで、ここに座っているがよい。多分わしがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、どんなことが起ころうとも、決して声を出してはならない。」

「もし一言でも口をきいたら、お前は到底《どうてい》仙人にはなれない。いいか。天地が裂けても、黙っているのだぞ。」

杜子春 「大丈夫です。決して声を出しません。命がなくなっても、黙っています。」

鉄冠子 「よし、では行ってくるぞ。」

(鉄冠子がいなくなる。杜子春、しばし静かに座っている。)

悪魔1 「こら！ 誰に許可をもらって、ここに座っているんだ。おい、答えろ！」

悪魔2 「こら！ 誰に許可をもらって、ここに座っているんだ。おい、聞いているか！返事をしろ！」

杜子春！

杜子春！

なぜここで座っているんだー！

なぜここで座っているんだー！

誰に許可をもらって、ここに座っているんだ。

おい、答えろ！

誰に許可をもらって、ここに座っているんだ。

おい、答えろ！

襟をつかまれて、殴られる。

誰に許可をもらって、ここに座っているんだ。

おい、答えろ！

また、襟をつかまれて、殴られる。

いろんな武器で脅かされる。でも、杜子春は声を出さない。

まったく強情なやつだ。

悪魔1・2 閻魔様のところに連れて行こう。

閻魔大王 「杜子春、誰に許可をもらって、蛾眉山に座っていたのだ。答えろ！」

こたえなければ、おまえの母親が痛い目に合うぞ。良いか」

杜子春 「沈黙」

閻魔大王 「良一し。母親を連れてこい。」

(二人の悪魔が母親を連れて来る。)

閻魔大王 「杜子春、誰に許可をもらって、蛾眉山に座っていたんだ。」

閻魔大王 「なぜ口を開かん。えーい やれー。」

悪魔 1・2 「エーィ！」

(二人の悪魔が母親の背中を激しく棒で打ちつける。)

(じっと耐えていた杜子春が、初めは小さい声、そして大きな声で叫ぶ。)

杜子春 「お母さーん！」

(と叫んで、杜子春が倒れ込むと同時に、母・閻魔大王・悪魔は、フロアーからはける。後にしばらくして、鉄冠子が現れ、倒れ込んでいる杜子春の前に立つ)、

鉄冠子 「杜子春 おもてを上げいー。」

「どうだ、わしの弟子になったところで、とても仙人にはなれないだろう。」

「今のお前の望みは何だ。」

杜子春 「人間らしい、正直な暮らしです。」

鉄冠子 「その言葉を忘れるなよ。わしは今日限り、二度とお前の前には現れない。さらばじゃー。」

おわり